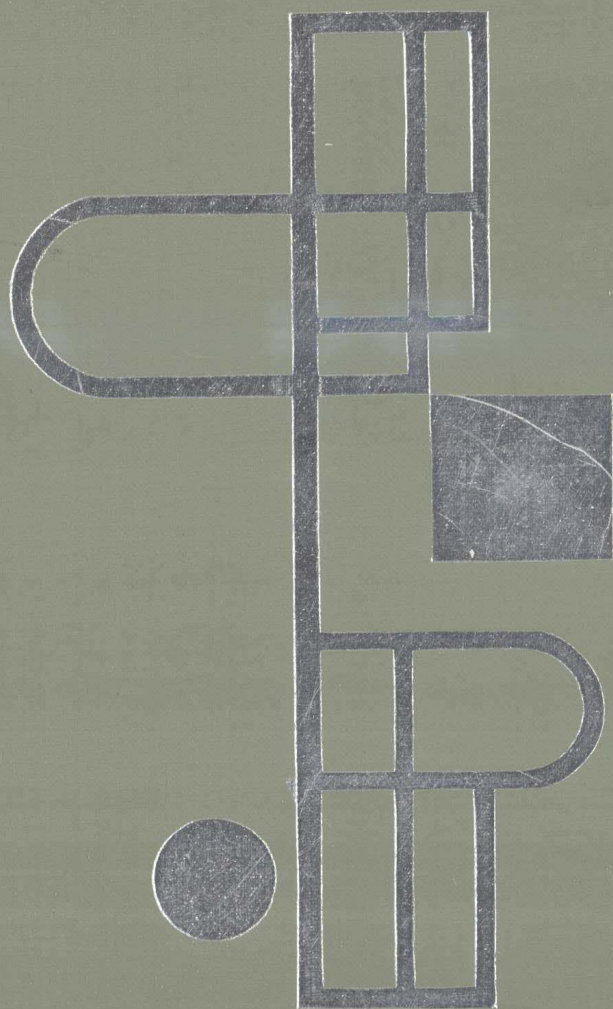
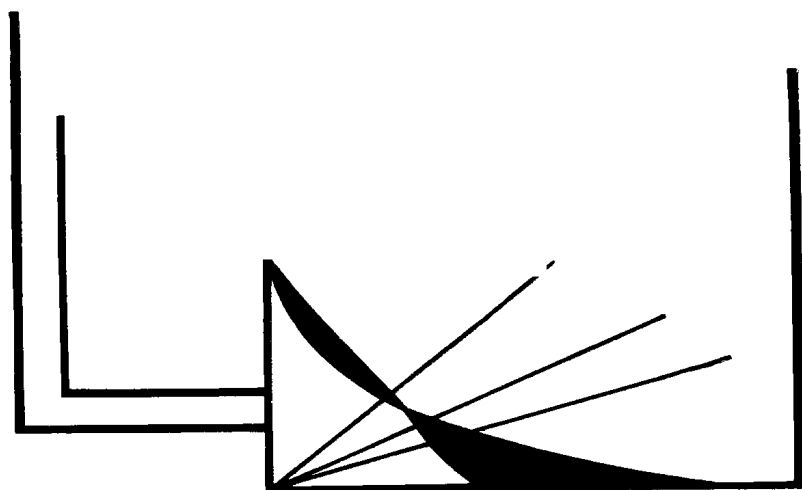




井上友一郎 集

新選 現代日本文學全集

23



筑 摩 書 房 版



井上友一郎集

昭和三十四年十二月一日 発行

著者 井上友一郎

発行者 古田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田 一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製印整 版式會社 精興社
本刷株 株式會社 精興社
株式會社 高錫堂

井上友一郎集 目次

絶壁……………五

続絶壁……………三

午前零時……………三六

銀座二十四帖……………一六

火の山……………七〇

女給夕子の一生……………三六

寂滅為楽……………七〇

汽笛……………七九

枯葉の美しさ……………三九

雪の下……………四四

井上友一郎の人と作品……………丹羽文雄 四三

解説……………小松伸六 四七

装
幀

恩地孝四郎
恩地邦郎

井上友一郎集

1

欣也は、世に謂う、枕を高くして寝ることのない男である。夜なかに、突如、「う、う、う」と自分の声で眠りを破つて、それがむなし夢だと覚るや、ああ、よかつたと思う心で、神経的に、寢床をつらねる弥千代の氣配をビクビクしながら窺わないではいられなかつた。

「ああ、びつくりした……だが、ずいぶん他愛ない夢をみたな」欣也は、暗がりに瞳を定めて多分弥千代が起きているのをそれと覚れば、先手を打つて、相手の腹を探ろうとする。

やや性質はちがうけれども、欣也以上に神経のはしっこい妻の弥千代は、もうその欣也の含みを持つた一ト言で、見るからにうとましい氣分に陥り、時ならぬ皮肉な問答を交えることが珍しいことではなかつた。

「眠れないの？」

「いや、寝てたんだ。しかし、うつらうつら夢をみて、うなされたようだけれど、ぼくは何か変なこといわなかつたかい」

「ウフフフ……」と夜具を顎まで引つ被つての

冴えない含み笑いを洩らしながら、弥千代は、そんな欣也のこまかい氣の配り方が氣に食わなかつた。「うなつてましたよ。いやな声よ。——あなた、また氣にかかる女の人でも出来ただわね？」

「飛んでもないさ。出来たら、きつと、のうのうと夜くらい愉しく寝らア……」

「あんなことを。——じやア、あの、きのう掛つてきたあの電話はどういう人なの？ あたくし、何もかも分つてるのよ。あれは、ちよつと普通じやアないわね。でも、いいわ。あたくし、どうせ街のつまんない女なんかは本氣で心配してないわ。今更、あなたも子供じやアあるまいし、あとさきは何でも心得て遊ぶ人だと思ふんですもの、人がいう程、やきもきしたこと一度もないわ。だけれど、これだけは心得ていてちょうだいね。お互い、軽い身分ではないのですわよ。あたくしは聞いた抜いてきたわけなのよ。世間というものとも關つてきたのですし、又、あたくしにしてみると、こうして、あなたと一しよになるため、どんなに、自分の魂と闘い抜いたか知れやしない。——物笑いはいいとしても、いまになつて妙ちきりんなことでもあると、あたくしの一生は元も子もなくなるわけですからね」

又、始まつたというような暗い氣分が、少しずつ欣也の胸にひろがつてきて、彼は、弥千代が理に落ちた口上を述べ立てれば述べ立てる程、その裏にかくされた情念のまたたきを無関心で

眺めやることが出来ないのである。欣也はことし四十二だが、弥千代は十一も齡上の五十三だ。本来、世間の標準から考えると、もう夙くに女のががつた齡頃であつたけれど、さすがに若い美貌の男を射留めただけのことはあつて、ちよつとみると、弥千代を欣也とはぼ同年に思いかねない人間さえて、五十三だよ、と聞かされると、へい、あの人が……やつぱり、女は魔物だ、ええ、と寧ろ驚嘆の眼をみはる人が多い。弥千代の前では、年齢のことを持ち出さぬのが礼儀であつて、親しい他人はもちろんだが、いまでは当の亭主である欣也までもが、五十三であれ何であれ、すべて一切、年齢に關つた話柄を口にすることさえ禁物にしているけれど、周囲で、その種の神経を配っているな、と氣付くことさえ弥千代の心を傷けることになるのだ。だから欣也は、日頃、努めて弥千代の齡を忘れたつもりでいるのだつたが、今夜のように左程のきつかけもないところを、ああだ斯うだと理窟ソばい厭がらせを聞いていると、やつぱり齡で、弥千代も、まさに女としては殘燭の消え果てんとする心境に似た苛立ちを持てあましているんだわいと思わぬわけにいかなかつた。それはいいが、しかし欣也の身にしてみれば、彼女の嫉妬が、いつも一段高所から天降りの様に降り濺いでくることで、二タ言目にはお互いに軽い身分でございませぬの、かつて苦しく聞いて取つてきた自分たちの戀愛だの、と勿体付けての束縛である。まして、その心根には、街の女給やダン

サアなどという種類の女たちを、あたまから輕蔑して、もし仮りに欣也が、その種の女たちと若干の関わりでも持つとなれば、それで傷けられるのが弥千代ではなく、却つて当の欣也だろうと決め込んでゐる高慢ききな論法を、欣也は何よりもいやらしく思うのだつた。

しかし、欣也も弥千代に対してあたまのあらぬ点があつて、それが二重に欣也を彼女に縛り付けてゐる節があるのだ。弥千代は、世間で所謂知性ある新しい型の婦人だといわれているが、二人の無理な不自然極まる結びつきも、実は、そういう穴に陥ち込む情痴自体を世間の人には、やれ知性だの、封建主義へのプロテストだのといつてゐるが、揆つたいのは欣也だけではなくて、内心、おそらく弥千代だつてチャンチヤラおかしい筈であつた。二人が一しよになるまでは、弥千代は社会運動家として名のある新垣徳三郎の夫人であつたが、この新垣の性的な或るルーズさに、あらぬ孤獨を悶々として過していたのを欣也の美貌と弁舌とがたやすく捉まえてしまつたのである。欣也はその頃、無名の音楽青年だつたけれど、三十二歳という年齢が含んでゐる不安定な憂鬱を、一種、才能の鬱勃たる未来性だと解した弥千代が、先き物買ひのその冒険を、欣也自身の水もしたたるような美貌にすりかえての戀愛沙汰になつてしまつた。弥千代は十分満たされなかつた性のやり場をいけば欣也の才能開發に仕向けたと思つてゐるが、それは動機で、結果ではない。又、眞の目的で

あつたか否かということさえ、なべて漠たるこの種の男女關係のさなかにおいては、当人にさえもよくわからなくなる事柄だつた。ただ、他人の窺い得られぬ兩人の秘密を土台にいうなら、彼等が一しよになつた歎びを動物的に享受したのは弥千代である。弥千代は欣也が氣に入つたのだ。それは、いかに透徹した判断と想像を以てしても、絶対に図り知られぬ、又、図り知られぬことが当然たるべき性の或る点について、氣に入つたのだ。つまり弥千代は、人間という動物として、この、みめ美わしい三十いくつの音楽青年の愛撫に捉まえられてしまつたわけだが、かかる官能の歎びを能う限り永続させたいという慾望が、彼女を驅つて、欣也を立派な音楽家に仕立てたいということになつてしまつた。この仕事は、すこぶる困難を極めるものだが、以来、十年という風霜にも挫けることなく、只管、弥千代が成し遂げてきた所謂世間的な闘いの跡を辿ると、それは一応、曲りなりにも成功を示したということになるかも知れない。弥千代は、欣也の精神というものを、つねに高級の状態でわがものにするために、最も露骨な動物本能を利用して、先ず女好きする欣也を、性のあらゆる幽玄な極致で満足させようと努めたし、又、その道を手落ちなく押し進めるため、彼女は、不斷に、自分が若くならなければならぬと丹精した。弥千代にとつて、二人の齡が、十一も隔つてゐることは、不利でもあるし不快でもあつたから、先ずその溝を埋めるために、彼

女は最初の三年間で、三ツ若返る努力を果し、中頃の三年間で、又、三ツ、若返つて、更に、終戦このかたの三年間で、又、三ツ若返つたので、いまでは弥千代を四十三に思う人間もあるくらいになつてしまつた。しかし、弥千代は、そういう金に糸目をつけない美容や服飾ばかりにウツツをぬかしてきたのではなく、欣也を、立派な音楽家に仕立てあげてしまふための努力さえ数々尽した。とはいへ、これは、前者にまさる困難な道であつて、肝腎の欣也自体の才能がヤクザなガラクタに過ぎなかつたらどうにもならない。欣也がガラクタであるか否か、これは、いまま欣也自身にはわからぬことで、又、弥千代にも本当のところはわからぬ。それなら世間の評価から推し量れば、その回答が曲りなりにも出そうなのであるのだけれど、まことに厄介極まることには、世間も、いつこゝ音をあげない鶯の聲の美醜を論じることが出来ないのである。だが、そのように、たやすく音をあげない鶯に仕込んでしまつたのは弥千代であつて、生れながらに手の込んだ商才を持ち合せていた彼女は、欣也が、世間に、美醜を乗り越えた評価を博すに至るには、やたらに美醜の判別を付けさせないのを得策とした。おしなべて芸道や芸事の世界においては、理窟で解せぬ人氣というものは立つもので、絵を書かずして画壇に現れ、ろくに文章を弄することなく、文壇の名声を保持して生きてゐる人間がある。弥千代が、どこまで、その理を意識下に弁えていたか

どうかは疑問であるが、結果としては、まさしく欣也がそれに似た存在をかり得てきたのは事実であつて、又、そのような唄わぬ鶯というものを、世間に対して押し立てていくために、弥千代は、そこでも、得意の商才を發揮して面白い事業を戦争前から営んできた。

いま、弥千代が欣也と共同で経営している東京音楽出版社は、彼等の豊かな生活を支えるために欠くべからざる財源になっているが、同時に、欣也が一種の音楽評論家として世を渡つていくためには、絶対に必要な足場である。欣也は、音楽出版社から楽譜や数々の書物を上梓し、つねに、モーツァルトだの、チャイコフスキだのといつてゐる人間どもと手厚い交りをつ結んでいるが、彼等の楽壇における名声が、少からず余光となつて欣也自身の内なる輝きだと錯覚させるわけであつた。

けれども、弥千代は、欣也の資質を決して輕んじてはいなかつた。彼女には夢があつた。動機や過程に、よしや多少の不純さがあつたとしても、詮じつめれば、この欣也には衆にすぐれた高貴な芸術家魂が備わつてゐると信じていたし、信じたくてならぬのである。すでに金もたつぷり出来たし、彼の名声の輝き出すのを手ぐすね引いて待ちかまえてゐる連中もある。だから弥千代は、欣也が立派な芸術家として伸びるための、あらゆる出費や心尽しを傾けて悔いぬ一方、もし、彼が、そんな弥千代を裏切つて、名もなき市井の泥臭い女給風情に、ウツツをぬ

かしはしないかと只管怖れてゐるのであつた。

「ねえ、あなた。あたくし、野暮はいわないつもりよ。——それが、ほんの遊びだつたら、あたくしも安心なのよ。でも、もし、あなたが、かりそめにも、下等な女に惹かされるようなことがあつちや、あたくし、我慢が出来ませんよ。あなたは、それを、単にあたくしのやきもちと考えるかも知れないけれど、それは飛んでもない大まちがいよ。なぜなら、あたくしが傷つく前に、先ずあなた自身が汚れるのよ。あたくし、それが何より怖いわ。それは、墮落よ。そして、あたくしの命取りだわ。ねえ、あなた、たとい、そんなことがあつても、あくまであんな女たちを相手にする時、遊びということにしてちょうだいね。仮りに、本気で惚れ込んだり、引きずり廻されたりなさるなら、よくよく考へて行動して下さいな。もし、変てこな女なんかと一しよになつたら、もう、あなたの芸術もこれ以上は伸びはしないわ。きつと、それが命取りになつちやうわ。あたくし、それだけが心配でたまらないのよ……」

欣也は、弥千代に掻き口説かれるだけはあつて、実は、これまで要領よく多少の漁色は試みてきたのである。しかし、つねに齡上の弥千代の瞳が光つてゐるので、思い切つたことも出来ず、さして未練はないながらも、まだ食い足りない淡い思いを残したまま、いつ果てるともなく袂を分つた女たちが何人もいた。もつとも、それは弥千代に対する知らず識らずのゼスチュ

アがさせる業で、内心、欣也も、別れて氣懸りになる女もいないわけではなく、又、事実、子を孕ませた女も一人ではない。弥千代に一切を嗅ぎ付けられて、その女との別れ話や生れた子供の処置などを殆んど弥千代が快刀乱麻の鮮かさで切り廻して納めてしまつた件もあるし、反対に、欣也が隠れて当の女とその子供を処理したり、或は子供が生れると承知しながら、金で片付けて逃げてしまつた例などもある。そのやり口は、概して要領のいい手際を示し、いかにも袖に振りかかつた露でも打ち払うようなポーズに終始したし、欣也はそれを弥千代に対する一種の思いやりだと信じてゐるのだけれど、案外、彼の生得の女性蔑視や人間蔑視が土台となつていたかも知れない。しかし、とにかく欣也が女と遊んだあとで、そういう相手を軽く片付け、さしたる拘泥を示さないのが、弥千代にすれば、せめてもの慰めにちがひなかつた。弥千代はそういう消極的な自己満足だけで、その生き地獄の苦しさをやつと堪えた。欣也に女が出来たらしいと覺ると、彼女はあらゆる方法を駆使して、正確なその情報をキャッチしようと努めるし、一方では、そんな欣也をあの手この手でわが身に惹き付けてみようとする。齡甲斐もなく、弥千代が所謂ニュー・ルックの毛羽立つような荒い格子縞のブラウスなんかを着込んで、ややもすると二十の娘も顔負けしそうな恰好で銀座などを歩いてゐるのは、何も單なる酔興ばかりとはいへなかつた。彼女は、欣也に出来た

女が、どうやら洋装のよく似合う女らしいと見てとると、その十倍もの金を掛けて、すぐさま見えざるこの敵との決闘を企てるのだ。弥千代が望めば、いまの日本で手にし得る最高の服飾は、わけなく彼女の身辺を飾ることになるのであつて、いかに相手が逆立ちしても及びはない。だいいち、欣也の対象になる女も、さして

広汎な層には及ばず、大概、女給かダンサアか、せいぜい音楽畑の若いジャアナリストという程度のものである。彼女たちは、気違いじみた弥千代の容姿を、蔭で大いに笑いながらも、次第にそこから庄迫感を覚えてきて、あまりにも掛け離れた弥千代と自分たちとの暮しむきの相違から、意識せずして欣也の不実を探り出すようになるのだつた。女給のアグリは、そのような

か想像がつくものだから、苦笑混りに耳をふさぐうとして、アグリは止めない。でも、あつたし、バツタリ真正面から顔を合すくらいになつて、何と、そりや、おツたまげたわよ……」

「うちの奴か。そうだろう」と欣也も、自分が、普段、弥千代に感じつつある或るあきたりなさを、そんなアグリ言葉によつてまぎまぎと新たにすることが、それを他人から指摘されると、不快になつて女房をかばいたくなる。「しかし、何も、おツたまげることはないだろう。女が、人工のあらゆる条件を利用して、自分を美しく見せることは、ライフというものを豊かにするものなんだ。それが生活に溶け込んだ教養というものだけ」

「御馳走さま。——えええ、お宅の奥さんは立派なお方でござアますよ。フン、だ。でも、ねえ、鷹取さん。あたし、ほんとにびつくりしたのよ。たしかに、あれは人間業じゃアないんだもの……」

「ふん」

「若く見えるの見えないのという騒ぎじゃアない。たしかに、あれなら大したことよ。でも、まア、最後まで聞いてちょうだい。何と、あなた、その二人で並んでくる女をチョロリと見ると、三十くらいに見える女は、お宅の奥さんじやアないのよウ」

「何だつて？」

「反対なのよ、ウフフ……つまり、その人と一しよに歩くもう一人の、二十くらいの娘さんが、実は、お宅だつたのよ、ウフフフ……」

「いつ会つたんだい」と、欣也も内心、その場のアグリは瞠目の情をアリアリと臉に描いて、ああ、あの弥千代の気違いじみた真赤なワンピースかな、と心で思う。「ごく最近だろう。赤いドレス、着てなかつたかい」

「ええ。それ、それ。真赤ですよ、金魚みたい。それに、顔が手入れの行き届いた廊下みたいにいやにテカテカ光つてるのよ。じつさい、すれちがつていく人が、じいッと見てたわ。でも、お金や教育のある人は大したものだ。そんなことは、てんで気にもしないで、実に悠々として四辺を圧しているようだけれど、何にしても、たまげちゃつたわ」

「それで、アグリは、要するに、そんな女を否定してるのか認めているのか」

と、故意に、そういう高飛車な訊ね方で、胸をそりかえらせている欣也は、元来、妙な見栄坊が負け惜しみな性質と溶け合つていて、心でどんなに惨めさを味おうとも顔には出さない。欣也は、実に痛いところを遠慮会釈なく衝いてくるこのアグリを、やはり、たかが女給風情と思うせいいか、沸々として反感がこみあげてきて仕方ないのだ。彼はこうして自分を不快に陥れる人間を、つまりは教養の乏しさのさせる業で、少しも心理洞察をやれない女は仕方ないな、と考えている。けれども、同時に、アグリに対す

る反感が昂^{たか}まるに従つて、弥千代の例の金魚のような服装が逆に彼女のどうしようもない年齢をうとましく感じさせる結果になつて、ふいに暗い絶望感に蔽^{おほ}われてしまふのだつた。その晩欣也は酒を飲んで、アグリと一しよに所謂悪所へ泊り込んだが、これがアグリの手となつてのことまでは、見抜いていない。アグリは、欣也が考えているようには、チャチな心理洞察家ではない。むしろ彼女は、意識せずして男を自分の身辺に惹き付けてしまふ魔力を備えていて、先ず彼をホテルや貸席へ誘つていく要求が生じると、いつも自然に弥千代の話を持ち出す慣わしになつてしまつた。欣也は、アグリとの關係を、さして深くは受け取つてはいなくせに、断続しながら容易にさつぱり清算することが出来ずにいた。もちろん、この目立たない關係も、いち早く弥千代は知つてしまつていた。動かぬ証拠を突きつけられた欣也は、例によつて軽くその事實を認めたけれど、まだ何か安心しきれぬ弥千代は、折あらば欣也に泥を吐かせてやろうと思つているから欣也としては夜もオチオチ眠られぬのが、自宅の共寝の場合であつた。欣也はアグリに寄せている、一種、性的な或る満足感を仮にも弥千代に嗅ぎ付けられまいと考へている故に、夜半、「うわツ」とうなされてさえ、「ハテ、いま、おれは何か都合のよくないやうな寝言を聞かれはしなかつたらうか」と氣遣う心で、そんな魚類の交尾のやうな、はかない女との数々の接觸を、反省したり、仕方

ないと思つてみたりするのであつた。

2

近頃、弥千代は、事業に馬鹿当りを取つたお蔭で、お金は溜まるし、申分ない邸宅は手に入るしで、身辺いよいよ華かさを加えるけれども、氣付くと自分がめつつきり老境へ近付きつつある淋しさが際立つてきた。而も、それは三十代から四十代へ踏み込んだという数字の上の變化ではなく、どうやら女の生命が決定的に絶たれるという、どうしようもない或る寂滅の予感である。月経は、すでに停つた。内股の筋肉もひつばると垂れさがり、ぶよぶよ指さきに撓うものは、もはや寧ろ筋肉というよりもただの脂肪かとさえ疑われる。しかし彼女は欣也と週に一度は寝てみた。性慾も無いわけではなく、時にカーツと胸を灼くやうな苛^{いら}立たしきで欣也の腰骨を感じることはあるのだけれど、概して、それには心理の比重が重く掛り、いわば食べるべきものはおいしく食べねば、といったやうな、食慾に近い要求に変つてきていた。

しかし彼女は、人生の第何幕目かが終りになつても、その緞帳^{でんちやう}をはねあげて、フットライトの輝きを満身に浴びながら、あくまで見物に愛嬌を振りまく氣合いで、若い欣也に立ち向わずにはいられない。欣也は四十そこそこだから男盛りだ。根が脂肪質の体質だから、昔をよく知る女たちには、いささか見苦しさを加えたといふものの、生來の色白と、性の魅力をロース肉

のやうにうちに湛えたムクムクした恰幅^{かつぷく}のいい美貌が、弥千代を痛く刺戟して止まないのである。弥千代はこれをむぎむぎと泥臭い女給風情の玩賞の具に供されてはたまらぬと思う一方、この白ぶくれの肉体を引き留めておくためにはやはり自分が精神的に、手強く欣也と結ばれていないといけぬと思うのだつた。彼女は、欣也を偉くしたくていつばいだつた。欣也を偉くさせることで、せめて欣也の精神を所有したいという動機が、しかし彼女の官能の或る脱落感からきていることは皮肉であつた。

或る午後、欣也は、骨休めに一しよに熱海へ出かけるという弥千代を、ぼんやり青山高樹町の自宅の居間で眺め尽し、そのどぎつい暑苦しさ、とより言ひやうのない厚化粧と猿芝居じみた衣裳で、あツと心で瞠目の叫びをあげた。

「何だい、君は。……どうして、そんなに、胸をブツクリふくらせているんだい」他の部分には眼をつぶつても、欣也はせめてそれだけは指摘せずにいられなかつた。季節も、そろそろ青葉にむかう時分のこととて、弥千代が白いウールのボックス・コートを若々しく着こなすのはいいとしても、その胸もとにブツクリ丸くふくれあがつたお椀のやうな小山は、どう考えても普通ではない。

「どうしたの？ 何が可笑しいのかしら……」と、真赤に塗り込んだ十個の爪が鮮烈な斑点となり、白ウールの胸さきを雨天の実のやうに、並んで轟く。八畳一間を隔てて見るなら、完全

に三十女に見える感じた。

「君、それ、ブラジャアを当てているんだらう？」

「ええ、そうよ」

「ブラジャアのなかに、何をそんなに詰め込んだの。乳房だけじゃアないのだらう？」

「あら、そんなに可笑しいかしら。——又、気のせいでしょう？」と、ちよつと暗い眼の色をして、恨むがごとく欣也を睨んだ。

欣也は、これをいわれるとタジタジとなる。

日頃、こちらで、氣を使つて、なるべく齡には無關心を装つてゐるつもりだが、或る場合には、弥千代はそういう欣也の神經の配り方それ自体に、ふいに絶望的な氣分に陥ることがあるらしく、却つて、そんな欣也の憐憫^{れんみん}というものを卑しい性慾の裏返しのように取るのだ。いまも、彼女は、欣也が彼女の年齡にこだわつてゐるんだな、と思つただけで堪らなく氣分を害した。

「あなたは少し囚^{とら}われていらつしやるのよ。近頃、どうも、あたしのすること為すことを見てすぐ年甲斐もなく、という風に考えるんじゃない？ 俗物的よ……」

「俗物的はないだらう。ぼくは單に健康な常識からいつてるんだ」

「それが俗物じみて見えるんですよ。だつて健康というものは、何も若い人だけの特權じゃアないでしょう？」

「おいおい、何の話だい」だが、欣也には何の話にむすびつくかは、よくわかつていた。焦点

は若さにくのだ。若さが弥千代には呪^{のの}わしく、それを基準に物事を観る欣也を、心にもなく俗物呼ばわりしなくては氣がすまぬわけであつた。

出掛けに、思わぬ氣分を害ねた弥千代は、青山から東京駅へ向うハイヤーのなかでも、いやに頰ツペたの溝を深くし、プリプリしていた。けれども、この種の不快さは、いわば自家中毒に似たもので、永く苛立つ^{さだ}つ先を欣也に向けていることの愚を誰よりもよく弥千代自身が弁えていた。熱海へ着くと、さつそく二人で、白いタイルの家族風呂へ入るのだつたが、湯氣のこもつた狭い浴槽のなかで見ると、年齢の小刻みな皺が消え失せ、ふと彼女が、じつさいに三十になるやならずの一個の美女に思われてくる。

欣也の心が、イキナリ、時を移すことなく弥千代の心にも投射するののか、「あなた、いま、あたし、何を考へてゐるか、おわかりになつて？」と、作為のポーズに、いかなる娘も及ばぬくらい^{なほ}の媚態を湛えて、消えかかつては僅かにまたたく情念の微かなほむらゐを、チラチラ男の視線のなかで燃やそうとするのであつた。

「さア、何を考へてゐるものやら。——もしかすると、昔、ぼくと一しよになつた時分のことでも思ひ出してやアしないの？」

「當つたやうで、当たらないやうだけれど、氣分的に、まア、そういつたものかも知れないわね。ほんとういうと、あたし、モーツアルトの或る曲を、あたまたに茫^{ぼや}とうかべていたの。だけでも、その曲を考へてみることで、氣分的に、あ

なたとあたしとの結び付きの美しさを、なつかしく思つていたのよ」

「モーツアルト？ ああ、モーツアルトか……」

「あなた！」

と、ザブンと浴槽内にさざなみが立ち、白い脂肪の輝^{きら}いているぶよぶよの細腕が湯のなかで密着してきて、

「あなた。きつと、いいお仕事なさつてちようだい。あなたこそ、出来る人よ。あなたは自分をお粗末になさろうとするくせがあつて、心配だわ。あたし、ただの嫉妬などでヤキモキしてると思われては、あんまり可哀そうよ。そりや、あたししも女です。女らしいこともいうわでも、根本は、あなたの天才を信じるからよ。ほんとに、あなたは、無教養な女どもと、一しよにされちゃア堪らないのよ。ねえ、あなた。ことは、そろそろ作曲のお仕事もしてちようだい。あたし、立派に、そのお仕事のお手伝いでもさせて頂くつもりですから……」

弥千代が感動をこめて喋つてゐるのを、欣也は、ちよつと美しいな、という風な眼で眺め尽した。なべて、この種の感動で胸をふくらませている際は、人は、誰でも普段より美しくなるものである。欣也も、心で、そう考へていたのであるが、いい塩梅に、彼は熱海へ出かけてくる直前、都合で何となく駆け違つて、ここ暫くは女給のアグリとも逢瀬を絶やしてゐるのであつた。それで欣也は、相手選ばずの要求に、全

身をムズムズさせていた矢先とて、とりわけ五十三歳の弥千代の齢を忘れそうになりかかつてきた。欣也はなおも喋ろうとする弥千代の肩さきをふわりと抱いて、思わず彼女が真赤になつてしまうようなふるまいに及ぼうとした。

「ねえ、ちよつと待つてほしいわ」辛うじて、その荒々しい接近から身を斥けて、「一応、あがつてからにしましょう。これじやア無理よ。ねえ、あなた、もう、あがりましょうよ……」

風呂場を出ると、宿の座敷はすぐ暮れてきた。南面のガラス窓から、まだ仄明るい海上が見渡せて、波がしらすれすれに白い海鳥の群れ翔ぶのを見つめながら、弥千代は、楽譜の記号を思いうかべているのだと欣也にいつた。たしかに淡い靄かげんだような水平線を、斜めに切つたり縦に切つたりして、ふわりふわりと浮き沈みするその海鳥の姿から、欣也も自然のメロデーは感じていた。黙つていたが、しかし欣也の考えていた曲は、或種の低劣な流行歌からヒントを得たものであつた。彼はそれをうたいたかつたが、傍で弥千代があたまごなしに冷笑するのを感じると、無心にそんなものがうたいえない。このもどかしさは折々欣也の感じつつあるところで、何も知らない弥千代のほうからモーツアルトの「ドン・ジョヴァンニ」などの話を持ち出されている際に、まさかジャズ・ソングめいた鼻唄を口にするのは出来やしない。

夕食の膳にはコクのある日本酒が供された。芸術的な感動で胸をふくらませていた弥千代は、

やたらに華やいだ声を出して、その盃を重ねては欣也に勧める。欣也は元来いけない口で、よたよたしながら眼のふちを染めていたが、食事をすませて、九時頃、もう一度風呂に浸つてあがつてくると、欣也はすっかり動物になり切つていて自分を感じ、すぐさま押し倒すようにして弥千代を絹布団のなかに入れると、弥千代が暫く逡巡の色をみせ、意外なことには、えらく苦痛をうつたえたりするのである。

「あツ、あたくし、どうしたのかしら——ねえ、あなた、悪いわねえ……」
「ナニ、いいさ、いいさ」と大上段に振りかぶつてみせた刀を、もとにおさめる吹ツ切れなさで、「しかし、いつたい、どうしたというんだい。気持があつても、身体が言うことを聞かないのかい」

「わからないのよ。自分で、およそ何だかよくわからないのだけれど、まア、これは疲れているのよ。一時的よ。でも、折角のたのしみなのに、あなたに悪いわ。あたくし、いいわ。あたくしも、そろそろ不自由な人間になつてくるのは覚悟してるわ。でも、あたくし、安心してるの。あなたが強い気持をもつて精神的に生きて下さるというんだから、あたくしも精神的に生きるわ。それは、あなたのお仕事を手伝つて、あなたを立派な芸術家に仕立てることよ。もし、このような天上的な結び付きが変らず生涯、続いていくなら、あたくし何も言やアしないつもりよ。ねえ、あなた。もし、よかつたら、アゲ

りさんという人を、そつとおうちへ入れてみていいわよ……」

「えツ？」と欣也は度胆を抜かれて、殴られたような眼付きで彼女を見据える。弥千代の腹が解げしかねるその一瞬前の衝撃で、彼女がアグリという名を正確に知つてのことへの驚きである。

「えツ、いつたい、何だつて？ 君は、今夜、どうかしてるぜ。それで、アグリという人間のこと、君は誰かにデマでも聞かされているんじゃないかね？」

「うそ。あたくし、一応は心得てるのよ。西銀座のクロフネの女給さんでしよう。実は、あたくし、作曲家の本郷さんと一しよに、つい最近、クロフネへ飲みに行つたわ。オホホホ、そして、店にゴチャゴチャと楽壇関係の人たちがいて、誰かが、そつとアグリさんのこと、口を滑らしてしまつたのよ……」

「つまらねえ俗物どもだ！」

「いいわよ。そんなに気になさなくなつたつて——」と弥千代は努めて冷静な態度を崩さず、ふと勝ち誇つたような顔付きをしようのであつた。「でも、あなた。実はあたくし、安心しちやつた。知らない時より、すっかり気持がおちついて、一面、あーあ、情けないなと考えただけど、やはり、こんな女とならば、まさかあなたも本気で熱をあげるわけがないでしょうと、すっかり安心しちやつたのよ……」
「うむ」

「皮肉と思う？ そうじやアないわよ。ほんとうの気持を知つてちようだい。あたくし、あなたが、あのアグリさんという人に、利用されてスポイルされるのが堪えられないの。でも、あべこべに、あなたが、決まつた必要で、ああいう人を、道具のように利用するなら、別に何とも思わないわ」

「それで？」

「だもんだから、もし、あなたが、そんなあたくしを十分理解して下さるなら、あのアグリさんの一人くらい、家へ入れたつていいじやアないの？」

「アハハ、むしろ、社の仕事で使つてやるほうがよくはないか」

「だめ。どうせ、まともな仕事なんか出来やしないわ。それに、家ならいいけれど、やはり、社では世間の口がうるさくツて……」

「それもそうだ。しかし、まア、どつちにしろ、そんな酔興は止めとこうよ。妻妾同居ということは、どんなに君が聡明な人間だつて、きつと、うまくいきやアしないよ」

「そうかしら。でも、隠れてコソコソされるより、案外、気持がよかアないかと思うのよ。あたくし、ともかく安心ですもの。安心したわ。あの人が、そういう人だと分つたら、いつそ気持がサバサバしたわ……」と、そういういながらも、弥千代は白い枕に顔を埋めて、ふいに笑つていような声で泣きだした。

「おい、おい。止せよ。何泣くことがあるもの

か。何も泣くことはありやしないよ」

「オホホ……誰も泣いてなんかいやアしない。

あたくし、考えると可笑しくツて。オホホ、ウフ、ウフ、可笑しいわ」

結局、その夜は、弥千代の身体が、いかなる愛撫にも堪えられぬと分つてしまつて、つい捨て鉢に、彼女は綺麗事を口にしたわけであるが、それはアグリという一女給への屈伏ではなく、日頃、彼女が精神だの芸術だのといつていた或る自負心が、自分自身に負けてしまつたことになるのだ。誰も彼女を打ち負かさうとは思ひはしない。彼女が自分に負けたので、つまり、それが弥千代のような女にとつては、一種、精神の老醜というより他はないのであつた。

翌日、欣也はもう一晚、宿屋にいたが、前夜あれ程、捌けた口上を述べ立てた舌の根が乾かぬうちに、弥千代は、不意打ちのような迫り方で、欣也の要求に応じていいと洩らすのだつた。二つ並べた高さ一尺に近いような夜具の上で、弥千代は、いかにも淫蕩な眼を光らせて、「アグリなんか、アグリなんか！」と繰返した。欣也も前夜の手前があつて、無下に斥けるわけにいかず、ふと狂おしいとも見えるような三十分を過したけれど、すでにそこから何の欲びも湧き出しては来ないのだつた。彼も、その種の慾望を、食慾みたいに習慣化してしまう危惧を感じながら、やはり、常住、手馴れた女を持つていなければ仕方ないと考え直した。

欣也とアグリとの関係は依然として消滅しないが、彼はアグリと特別な仲を続けながらも、又、他の女に手を出すことがあつた。しかし、それは、アグリは妙なはからいに扱ふことで、ややもすると欣也が秋風を吹かしそうになるのを察して、アグリは所謂欣也ファンというような極めて若い女給たちを、欣也に取り持とうとするのであつた。アグリはこし二十九だが、クロフネでは姐さん株で、店のなかでは睨みが利いた。もとより、すべての女給たちがアグリに願使に甘んずるわけではないが、最初はやはり利を以て欣也に接近していた女給たちが、忽ちにして欣也ファンになりかかる汐時に、ちよくちよくアグリが水を向ける。「鷹取欣也は、どうやらあなたに思召しがあるらしいわよ」と言われて、そんな連中も欣也に親しんで損はせぬので、結局、巧みに欣也の漁色の対象に入つてしまふ。けれど、そんな彼女たちを、あと腐れなく捌くことはアグリ得意とするところで、そこから事が大きくなつたり、深い関係に突き進んだりはないのだつた。

弥千代もそれを薄々と感じていたが、表面、嫉妬はじつくり圧えて、すでに肉体の寂滅を知るとして役立てたいと念願した。「アグリなんか、要するに下等な官能の戯れなんだ。あの連中が、いくら夏の虫けらみたいに欣也の身邊にうよう

よしても、どうせあとへは何も残さない一時の影にちがいないから……」こう思い込もうと努める弥千代は、つまり、五十三歳の自分を、欣也にとつての天上の恋たらしめようと希つたのである。天才的な芸術家には、つねに二重生活の宿命が付きまとうものであつて、あの「ドン・ジョヴァンニ」の作者の恋にも、地上的なコンスタンツェと、天上的なアロイジアが有つたのだつたが、弥千代は自らを神にもしたい幻想に取り憑かれつつ、彼女自身が欣也の天上的な恋人たらんと夢みたのである。

人はたやすく自身の妄想に従つて、神にも悪魔にもなれるけれども、それを他人に及ぼすことは極めて至難な事柄だつた。弥千代も、自分の心のなかでは、ほしひままにアロイジアに成れたけれども、それを世間に押し抜けるには、やはり欣也を、鳴く音美しい鶯にせねばならない。そこで彼女は、欣也を色褪せた閨室で責める代りに、いまは次第にピアノの傍に引き留めておく策を講じた。そのため新たに十八万円で買入れたドイツ製のピアノが、暫く欣也の芸術意慾を掻き立てるかに見えていたが、殆んど一篇の作曲をも成さぬうちに、彼はクロフネの女給の尻を追ツかけ廻し、遂に十八になる処女を孕ませるような事件が生じた。子供の処置を相談されたアグリは、もちろん心当りを物色して、その朝子という小娘同然の可愛い妊婦を、下落合の、とある産院に紹介した。

朝子は妊娠四カ月にもなつていたが、すでに

酷暑の八月のまっ昼間、その産院の雨漏りで腐りかかつた六畳の汚い畳の上で、「オールド・ブラック・ジョー」を鼻のさきで口ずさみつつ、やがて、「う、う、う、う」と唸り出し、よく肥え太つた男の胎児を死産した。手術は予定通り成功したのだ。すべての処置はアグリが欣也から預かつていた十分の金によつて果すことになつていたのに、当日、何思つたのか、立派な水菓子の盛り合せ籠を抱えて、わざわざ下落合の谷間のような高台の下にある小さな産院を訪れてきた欣也は、全身、汗ぐつしよりで、殆んど麻の背広の背まで水浸しになつたように汗を透らせ、鼻さきからもポトポト汗の雫を垂れながら、朝子の寢床を覗きにきた。

「おう。えらかつたろう？ でも、よかつたなア」と欣也は働わりをこめて、いつた。

「うん」

「それで、首尾よくすんだつてね……？」

「ヘツチャラよ」

だが、朝子はさすがに蒼白い顔をしており、癖で、事もなげに軽く頷くのも大儀そうな様子をみせた。

「しかし、あところが大事だそうだ。あとのことは心配しないで、十分養生しなくちやアいけないぜ。——何ぞ、欲しいものはないかい」

「いいえ、何も欲しかアない」

「何か、して欲しいことはないかい」

「何もないわ」

「それでも、何か希望があつたら遠慮なくいつ

てごらん。遠慮なんかするんじやアないよ。——どう？ 何でも、ぼくに出来ることなら？」

「ウフフ」と微かに老女のごとく唇のさきで陰気に笑つて、「何もないけど、考えとくわ」

「何だつて、いうがいいよ」

「一つあるわ。——でも、止そう……」

「どんなことだ。いつてごらん」

「あなた！」

と、うるむような瞳を起して、斜め上から、畳に片腕ついて覗き込む欣也の視線を、こね返すように、そつと見据える。

「何だい」

「あなた。あたしを奥さんにしてよ……」

「え？」

「それ、あなたには出来ないかしら？ でも、あたし、そうして欲しいわ」

「何だ、急にそんなことを……しかし、それは、ちゃんと元氣になつてから話し合おうよ。いま、そんなこと考えないで……」

「考えてやアしないんだけど、もし、あなたに出来るなら、奥さんになりたいのよ。だつて、あなたの奥さんに出来ないことを、今度、あたし、したわけなのよ」

「それはそうだ。しかし、ここで、そんな話をゴテゴテしているわけにはいかないだろう。いまは何も難しいこと考えないで、早く養生することだよ。それより、この際、差当つて困ることから、いつてごらん。急ぐことからしていいよ。お金は、アグリちゃんにも渡してあるけ

ど、別に、余分にあげてもいいから」

「お金なんか要らないのよ。頂いたつて仕様が
ないわ。——それじゃ、あたし、心細いから、
あなたに毎日来てほしいわ」

「毎日？ うん、よし、それはなるべく実行し
よう。そうさな、多分、一日一度、顔出しは出
来るだろう。よしよし、それは約束するよ」

欣也は、朝子が相当苦しい人工流産に堪えた
ことを知っているので、ここで彼女に出来るだ
け逆らうまいと考えていた。アグリが一通りの
世話を焼くことになつてはいるが、朝子のい
うまま、毎日、多少の無理をしてでも下落合まで

来てやろうと心に決した。欣也はそれから一日
一度は、弥千代の前を取り繕つて、せつせと産
院を訪れてきた。二日が四日、四日が五日とい
う風に、朝子の退院がずるずると延されて、結
局一週間はたつぷり掛つて、ようやく歩いて産
院から帰つてよろしいという日がきた。前日、

欣也は、その退院の予定を聞かされていなかっ
たが、夜になつて、アグリが、急に欣也の所へ
電話を寄越して、俄かに退院の予定を伝えた。

欣也は、その日、予定通りの正午すぎ、谷間の
ような蒸暑いその産院にやつてきた。欣也はア
グリに世話させながら、その、こまかい拘束を
嫌つていたので、出来れば自分の手によつて朝
子退院の一切を、自分が何でも宰領する氣にな
つていたので。

退院の手続きは簡単だつた。要するに金を払
つて、医師に当座の養生法を聞くと、そろそろ

歩いて電車の駅まで行くことである。近くに、
新宿へ出るバスはあつたが、これは医師が厳禁
したので、欣也とアグリは、左右に朝子を擁し
ながら、西武線の駅まで出ることにした。

まだ陽の高い午後三時頃、三人は下落合の高
台をそろそろと歩いていると、突然、背後で、
彼等呼び留める者があつた。振り向くと、そ
の産院の女中であつて、小脇に何かこつてりし
た紙包みを抱えている。

「何ですか」と欣也がいうと、女中は照れたよ
うな視線を伏せて、その包みを眼前に持ち直し
て低い声でぶつぶつと何事か囁いた。

すると、こつちで立ちどまつて眺めていた朝
子が「あッ」と俄かに小さく叫んで、「あなた、
あなた！」と欣也を呼んだ。

「うん？」

「分つてるのよ。それ、こちらへ戴いといてち
ようだい。こつちで持つていかねばならぬ物な
んだもの……」

欣也は女中の差出したその重いかめみたいな
品物を、ずしりと両手に感じながら、イキナリ
想像が閃いた。

「おお、多分、あれじゃアないのか。あれなん
だろう？」

「そう。あれなのよ……」

チラと軽く眺め捨てて、傍のアグリは苦笑と
も憫笑とも付かないように顔を歪めた。そして
再びもと通りの並び方で歩きながら、アグリは、
「へえ、驚いた。——それは、やつぱり、こつ

ちで処分しなくてはいけない規則になつてゐるの
かしら？」

「そうらしいの」と朝子は娘のように、あどけ
なく微笑んだ。「やつぱり、こつちで、お葬い
すべきなのよ。何しろ足かけ五カ月に入つてゐ
んだもの。——いいわ、どこかのお寺へ頼んで
みるから……」

死んだ五カ月の胎児と知つて、欣也は麻服の
左の胸に抱えた小さなかめに無関心ではいられ
なくなつてしまつた。欣也はちよつと悲痛な氣
持になつた。西武線の電車に乗つて、高田馬場
で、更に省線に乗り換えたが、欣也はアグリや
朝子たちを相手に、あらぬ雑談に耽りながらも
小脇に抱えたかめの重さがそのまま体内に食ひ
込んでくるかに感じた。彼は、かめそれ自身の
重さと、なかの胎児の重さの比重についてイラ
イラと思ひ惑つた。彼は人生のはかなさにつ
いて考え込んだ。そして、うらうらしためまいの
ような微かな苦痛で、欣也は、生きてゐる人間
よりも、すでに生の一切に近付き得ずに一個の
小さなかめの底におさまられた胎児を思うこと
によつて、はるかに人生というものの広大無辺
について考えさせられてゐるのであつた。

「鷹取さんは、これからいつたい、どうするつ
もり？」

新宿のホームで降りると、アグリが二人の顔
を半分々々覗きながら、これからの足取りを訊
くのであつた。アグリとしては、ここで、かめ
を欣也の手から朝子が受け取り、多分、小田急